

## 第二章 宇宙戦争はじまる

2023/1/17 追加・修正 by OHYABU

(一)

どんよりした灰色の空は、いつものとおりのはずだった。いつものとおりの日常がはじまるはずだった。しかし――

人々は閃光に、空を見上げた。そして――

あたりは焦土と化した。

焼かれ、叩きつけられ、吹き飛ばされ、突き刺された人々は、自らに何が起こったかわからず、苦しみあがき、助けを求めた。

しかしもたらされたものは、助けではなく、別の理不尽なる強圧……。

トロント市での惨事は、ピネロン星に住む人々にすぐに伝えられた。

地球のロケットが爆発し、市一帯を壊滅させた。

原爆という、地球の旧式兵器が爆発したのだ。

おそろしい放射能が一带に放たれている、助けに向かった人々もそれに巻き込まれて死に絶えたと、繰り返して伝えられた。

ところが、肝心のトロント市内の状況は、ほとんど伝えられなかった。

市へと向かう地下道も地上航路も、時を置かずすべてが閉鎖され、誰も市に行くことができなくなっていたからだ。

閉鎖前にかろうじて市から逃げてきた人々が、専用の施設に保護されて治療を受けていることや、彼らの傷の具合などはかなり詳細に伝えられたものの、肝心の被害者本人の生の声が伝えられることはなかった。

不完全な情報に、人々の不安や恐怖はかえって増長し、先鋭化していった。

積もり積もってきていた不信やうっせきが、いつきに凝縮して吹き上がった。

地球はなぜそんな危険なものをおの星にもってきたのか、これは地球からの先制攻撃ではないか、と。地球人は自分たちから先端技術を吸いとったあげく、未知の病原菌だけでなく、おそろべき放射能によって自分たちを滅ぼそうとしているのではないか、と。

そうした憶測に異議を唱える声も、当然あがった。地球が攻撃を加えた証拠はどこにも

なくただの事故ではないのか、それよりも今はトロント市の状況情報が完全に遮断されていることの方が問題ではないか、と。

そしてなによりも、自国政府が地球の原爆処理を引き受けていた事実が明るみとなったことで、なんでそんな取引をしたのかと、政府非難が爆発的に広がった。

一方で、放射能の拡散を心配するがあまり悪質なデマが広がり、あらゆる経済活動が停滞し、交通が大混乱した。

そんななか、ピネロン星に住む、あるいは滞在していた地球人への暴力もはじまった。ただ、地球に住むピネロン人の数に比べるとはるかに少なかったためか、迫害が拡大する前にほとんどが拘束され、伴侶の一方がピネロン人の場合にはそのピネロン人の伴侶ごと、つまり一家全員が姿を消してしまった。

地下のどこかに監禁されたと、一部の人は噂した。

青年ヤートも、自らを襲ったためまぐるしい事態に、すっかり混乱していた。

いきなりトロント市に住む兄夫妻のもとから引き裂かれた。兵士たちに連行されていく途中で、トロント市の惨状を知った。

十八歳になったばかりだった。背は高く、細身でなで肩。肌の色は薄い、髪と瞳の色は、ピネロン人にはめずらしい漆黑。目は少し垂れ目でまつげは長い。

その目をつり上げ、家族のもとへ戻せ、との絶叫するも抑え込まれ、無理やりピネロン星の成層圏付近に浮かぶ大型宇宙船にまで連れていかれた。

長い通路を通り、広い司令室に入った。

兵士たちは、自分たちよりも背が高く、手も大きいヤートの抵抗を抑えるために、数人がかりで囲い込み、上司にあたる人物のもとへと連れて行った。

その人物は、部屋の中央に陣どる大きな机の前に座っていた。

「ホイヘンス司令官！」

部下と呼ばれて振り返ったのは、高く跳ね上がった髪に、猛獣を思わすような凶相の男。冷たく刺すような瞳は、ずっとなにかを思いつめていたのか、赤く充血していた。

座ったまま、椅子を部下たちの方にぐりと回した。

筋肉質でがっしりとした体つきの、四十歳台ほどの男は、足を組み右手には長い棒のようなものをもって、ヤートをにらみつけた。

「名は何という？」

「ラフラス・ヤート！」

「……なるほど、目もとは母親似か。たしかに次男坊だな」

「は？……な、なんなんだ！お前たちはなんでこんなことを……」

おそれを知らないヤートの叫びに、兵士たちは青くなる。

「トロント市へ戻せ！兄さんたちが心配なんだ！戻せ！」

ヤートは後ろ手に縛られていながらも、兵士たちをはねのけ、ホイヘンスと呼ばれた男に向かつて容赦なく叫ぶ。

兵士たちはますます真つ青に。「司令官殿になんとということ……」

しかしヤートはひるまず、ホイヘンスをにらみつけ、叫び続ける。「帰せ！帰せ！帰せ！」

ホイヘンスは顔色を変えることなく、  
「おやじとおふくろはどこだ？」

「知らない！こっちが聞きたい。あんたたちがさらっていったんじゃないのか？……返せ！」

「ふん……」

やっと、ホイヘンスは立ち上がった。

ヤートと同じぐらいの長身だった。

そして、右手にもった棒のようなものでいきなり、思いっきりヤートを殴りつけた。

「が！」

叫び声をあげ、床に転がるヤート。

しかしすぐに顔を上げ、ホイヘンスをにらみつけた。

ホイヘンスは膝をつき、口から血を流しながらもなおも敵意を放つ若者の顔を棒でもち上げ、上からまじまじと見つめた。

「いい根性だ。その髪と瞳の色。たしかに怖れを知らぬ血だな」

「……？」

「一日遅れてたらお前も巻き込まれてた。わしの運かお前の運かはわからんがな」

そう言うと、ぐっと顔を引きつらせ、「そう……こんな事態が起きるとは、お前を拘束した時点ではさすがのわしもわからなんだ。わしは大切な姪を失ってしまった。だから、兄貴と親族を一度に失ったお前の気持ちはわからなくもないのだ」

「死んだとは限らない！現地に行かないと」

「もう遅いのだ！」

ホイヘンスはそう叫ぶと、ヤートに背を向け立ち上がる。

「予定ではお前ではなく、兄貴だった。兄貴だったら確実に居所を知ってたはずだ。だが予定が狂ってお前になった。まあお前でも問題はないと考えた。あの売国奴どもを呼び戻すための人質としてはな」

そして、すぐにくるりと振り返り、

「ただそれも、生きていればということにはなったが……」

「売国奴とは誰のことだ！」

「お前のおやじとおふくろだ」

「ふざけるな！母さん父さんは、この星のためにどれだけ貢献をしたか！」

「黙れ、しよせんは無能だ！お前のおやじもおふくろだも、この星のあまたな政治家のように無能だったのだ！だから地球につけ入れられ、こんな事態を招いたのだ！」

ホイヘンスは、立ち上がるうとしていたヤートの体の上に棒を落とし、再び床に叩きつける。

「あきらめろ。お前の兄貴は死んだのだ。だが心配するな、兄貴のかたきはわしがとってやる。必ず絶対にとってやる！……予定は変更、一気に叩く。誰もわしには逆らえんようにしてやる！」

そう言ってホイヘンスは、ぐっと棒を握りしめた。

やがて、混乱を抑える大きな声が、ピネロン星全土に響きわたった。

——すべては地球のしわざだ。あらたに放射能がまき散らされる前に、このピネロン星を守らねばならない。その前に……安心するがよい。この国に長年混乱をもたらしてきた政治家や官僚ども……汚職と腐敗にまみれ内部対立を起こし金に目がくらんで悪魔の兵器を引き寄せ地球側の攻撃を招いた極悪人ども……そいつらはすべて一掃した。替わって私が国を主導する。私の名はホイヘンス・レム。聞いたことはあるう？かつて内戦を終結させたホイヘンス・レム、私は彼と同じ名を持つ彼の息子だ。その私が、父の名を汚すことなくこの国をおさめるのだ。私はこの星を、この国を守る。かならずや皆の家族のかたきをとる。なのでこれからは私を総統と呼べ——と。

人々は、自分たちが選んだ者たちからなる合議制の政府が、ひとりの軍人によるクーデターで一方的に倒されたことを知った。

しかし、この「救世主」的演説にハメられたのか、不安と恐怖におののいていた人々は安心し、事態を歓迎した。

ほどなく人々は、自分たちが強制的に徴兵されることを知ることとなる。

政府に反対する声は、徹底的に弾圧。何かあればすぐに拘束され、場合によっては拷問にかけられ、粛清されていた。

そうしたしうちへの批判は、高まる報復への熱狂がおおい隠していった。

(11)

地球——

アデル大統領による開戦告知は、ピネロン星からの宣戦布告から一週間もたつてのことであつたことが、のちにわかつた。

そればかりか、ピネロン星からの宣戦布告の翌日には、三つのワームホールを占領されてしまつていたことも判明した。

ピネロン星とを結ぶワームホールは、木星エリアに二つ、火星エリアに三つあるが、そのうち木星エリアの全てと、火星エリアにある一つが、わずか一日で占領されてしまつたのだ。

そうした事態に、じつは地球国軍事部は即時対応していた。

占領されてしまつたワームホールに対しては、地球への直接攻撃を阻止すべく、地球側出入口に戦闘機を集中させた。占領されていないワームホールに対しては、ピネロン側出入口近くにある地球基地に兵を送り込み、絶対死守を命じた。

そして、木星エリアの兵や宇宙船を、できるかぎり火星エリアへと移動させた。

木星エリアからの地球への直接攻撃は、木星の強力な引力と、木星と火星間の小惑星帯が壁となることによつて、敵にとつてもリスクが高い。よつて味方の兵力が限られているなら、より危険な火星エリアへとまわすことが得策と判断されたのだ。

そうしたすべての対策は、地球国軍事部総司令官ビッツの独断のもと、地球国の全政府機関とアデル大統領の承認なしに行われた。

軍事部以外の政府機関や経済界は、最初は軍事部を批判し、戦火拡大を抑えようと図るも、ピネロン側の人脈のほとんどをホイヘンスによる粛清で失い、戦争回避の手段を失ってしまったことで、結局は軍事部の動きを容認せざるをえなくなってしまった。

それでもアデル大統領の直属機関でもある行政部総務局は、死傷者や捕虜にされた者が多数出ていたにもかかわらず、ピネロン星からの攻撃の事実を公にはせず、軍事部が要求する戒厳令も許可しなかった。ピネロン人脈の財産を、できるだけ混乱なしにいつきに差し押さえるためであった。

すべてが混乱を防ぐために、さらにはピネロン側への情報流出を阻止するために、極秘に行われることになったが、スパイ摘発のためとした軍事部によるピネロン人拘束が想定以上に大がかりなものになってしまい、各地でトラブルが頻発。

もはや隠しきれないと判断した総務局は、ピネロン星からの攻撃の事実を公にしたが、ID時計へのノイズ挿入など、不穏分子による情報操作などで混乱はさらに拡大し、やむなく大統領自らによって、開戦告知と戒厳令施行命令が正式に地球全土に伝えられることになった。

人脈豊富なビッツは、ピネロン星からの宣戦布告直後から、北米にあった政府機関の広報部、治安部、交通部を軍事部の直接指揮下に置き、広報部所属のマスメディアを支配。それによって戒厳令施行後は、さかんにピネロン側の脅威と地球の危機を強調する報道がなされるようになった。

そして経済界を支配するリース財閥が、軍事部への協力を明確化したことで、地球国の全行政組織は軍事部の意向を無視できない組織と化した。

要するに、軍組織のもとでの地球一体化がなされていったのだ。

ピネロン星でのようなあらゆるさまざまな徴兵や言論統制は行われなかったが、代わりに綿密で陰湿なやりかたがとられた。公務員や、組織のトップへのしめつけである。抗議する者と逆らう者には、公職追放や職場追放、場合によっては逮捕などの処遇が待っていた。

そうした上へのしめつけは下へのしめつけを生み、すべてが従うしかなくなってしまう。結果、例えば教育機関は、兵士を選び送り出す機関と化していった。

御用メディアの効果もあり、地球国民の多くはピネロン憎しに染まり、悪を倒せ地球を守れとのかけ声のもとで熱狂し、志願兵も増えていった

しかしそのことは当然、地球に住むピネロン人たちに、大いなる災難を与えることとなった。

開戦告知が伝えられた時期には、すでに半数以上のピネロン人が拘束されていた。残った者たちの拘束のさいには、暴力をふるった者は厳罰に処すとの治安部命令が出されたものの、現場では徹底されなかった。各地でリンチなどによる凄惨な事件が頻発した。

それらに抗議する声は、ほとんどあがらなかった。メディアが報道しないからでもあるが、たとえ知ったとしても抗議するのは危険。治安部を指揮下に置き警察公安機能をも兼ね備えるようになっていた軍事部に、逮捕・拘束されてしまうかもしれないからである。

ハーフの子供たちの処遇については、十歳以上は拘束せず、十歳未満は状況に応じて

との命令が出されてはいたが、このあいまいな表現が現場では曲解されてしまう。急場しのぎでつくられた各地の収容所での定員オーバーと混乱を懸念して、事実上ハーフの子供たちはすべて収容しないとの解釈がなされることに。そのため、乳飲み子や幼児が母親から引き離され孤児院へ送られるなどの悲劇が、水面下で多発した。それらに対して抗議する声も、当然ほとんどあがらなかった……。

「しかたがないのだ。今は緊急時なのだから」  
そうつぶやくのは、白い髪に白いひげの温厚そうな顔をした、齢七十近い老科学者のソクラトン。

ピーターは今、彼の広い邸宅に個室を与えられ、住んでいた。

自宅を何者かに焼かれ野宿状態に陥っていたところに、軍事部副司令官と名乗るユジス・ニックという軍人が現れた。ほのかに良い香りを漂わせる、細身の優しげな顔をした四十歳台の男で、彼に連れて行かれたのが、子供の頃から何度か行ったことがあるソクラトンの邸宅だった。北米の、海に近い地の高台にあった。

ソクラトンはピーターにとっては、孤児であった父ロバートの後見人でもあり、自分にピーターという名をつけてくれた名付け親でもあった。

専門は宇宙工学だが、人間工学にも詳しく、医師の免許も持つというたいへんなエリート。彼の教え子たちの多くは、中央政府機関の中核にたくさんいて、ビッツも彼のもとでおもに人間工学を学んだという。

慈善事業にも熱心で、人道主義者と称されていた。

しかし親友のレザーは、そんなソクラトンを毛嫌いしていた。しよせんは権力に媚びているだけだろうと、吐き捨てていた。

そのレザーは姓がキニスキー。母を連れ去った男の甥だったことを、ピーターはソクラトンを通じて知ることとなった。

すでに戒厳令は解除されていた。

にもかかわらず、あいかわらずレザーとは連絡がとれない。ふた月以上会っていないかった。さまざまな手段を使って連絡しても通じない。

——お前はいつもカッコつけすぎだよ。本音を言えよ。だからマトモに女の子とも付き合えないんだ。ホントのお前はそんなじゃないんだろ？——

そう言っつていつも、自分をからかっていた。ちよつと頑固だが、明るくさっぱりした性格の男だった。正義感が強くて、理不尽なものには常に立ち向かう。その反面、異性の話などはあからさまに語る。顔は似ていてもあの叔父とは、全く印象が異なっていた。

彼からカッコつけていると言われると腹が立つが、本音を隠しているとと言われると、たしかにその通りだろうと納得する。実際ハメをはずそうとしても、本音を言おうとしても、心のどこかでブレーキがかかるのだ。

ピーターは、自分自身を地球人だと思っついても、まわりは単純にはそうは思っつてくれないことがわかっていた。自分に向ける待遇やまなざしがふつうの地球人に向けるものとは時にかき離れていることも、幼い頃から感じとっつていた。

好奇や疑惑、時に非難。それらは、隣人や学校といった、自分を見知ったコミュニケーションの中でも感じることはあった。自分に直接刃が向かってこないのは、父や母の立場があったること、いわば自分が特権階級に属していることからだろうと、なんとなく理解していた。

それだけに、状況が変われば刃は顕在化し、容赦なく自分に向かってくる。そうした漠然とした不安と恐怖が、常に心の奥底で渦巻いていた。

だから無意識のうちに、波風立てないように無難に生きようとしていたのかもしれない。そんな自分を、レザーだけは、はっきり非難しつつもあっけらかんと受け入れてくれていた。

その彼が今いない。

そして、おそれは現実化してしまった。刃は顕在化し、自宅は焼かれてしまった。

その衝撃たるや……。

「?!」

いきなりの衝撃だった。

ピーターは、自分に何が起きたのか、すぐには理解できなかった。

水?……なんで水?

頭に水をかけられたのだとわかった。椅子に座って物思いにふけていた最中に。

目の前には、きよとんと澄んだ瞳が二つ。

ツインテールの髪形の、大きな瞳の少女。左手で人形を抱え、水を入れていたらしいコップを右手に持っていた。

少女の名はリンダ。今年で十三歳。

ピーターが気づいたことで、いつき後悔の念が吹き上がったらしい。「ごめんなさい!」

ごめんなさい!どこかへ行つたんじゃないかと心配で……」

そう言つて部屋を飛び出すや、すぐにタオルと雑巾を持って引き返してきた。

ピーターにタオルを手わたすや、悲しげな表情で「ごめんなさい……」とつぶやき、雑

巾で床をふきはじめた。

ピーターは、しかたがないなあと軽く笑みを浮かべた。

初めて会ったのは、彼女が八歳の時だった。子供の頃からたびたび訪ねていたソクラト

ン邸で、事故で亡くなった彼の息子夫妻と入れ替わる形で、ある時からいきなりいたとい

う印象だ。

最初は、その息子夫妻の娘だと思っていたが、そうではないらしい。

会ったところから頃からすでに、今回のように突拍子もない行動に出ることがしばしばあ

った。

両親もきょうだいもおらず、人恋しいので、常に相手の気を引こうとする。そうした衝

動を本人自身抑えきれないようなので、できるだけ叱らないようにしてほしいと、ソクラ

トンから常に言われていた。

だから、タオルで頭をふきながら「いいよ、いいよ」と言い、リンダの頭をなでた。

すると彼女はうれしそうに立ち上がり、ピーターの右手を両手で握った。

人形を抱えたまま両手ですりすり彼の手をこすりつつ、今度は一転して不安げな表情を浮かべ、

「変なおじさんたちがいっぱい来てるのよ」

「誰？」

「四人。今おじいちゃまが居間で会ってる」

「誰なんだ？」

「名前はね、ビッツ、ニック、キンスキー、それに……それに……」

彼女は時に、突出した記憶力を発揮する。

「それにもうひとり誰?!……誰!」

思い出せないことにパニックになったのか、発作的に、再び部屋を飛び出した。

時おり起こる反応だ。彼女に限ってはさほど心配はいらぬことを、経験でわかっていた。た。

それよりも――

(キンスキー……あの男も来てるのか……)

ピーターは座ったまま、不愉快そうに顔をゆがめていた。

母を拉致した男。平気で一般市民に銃を向けようとした男。それでもあのレザーの叔父。

――突然ハツとなる。

そうだ、キンスキーならひよっとしたら、レザーのことを知っているかもしれない。

抑えがたい衝動にかられ、立ち上がった。

(リンダ、ごめん……)

彼女がしばらく入ってこれないように、部屋のドアに鍵をかけた。

そしてトランクを開け、そこからイヤホンを取り出した。

(三)

「……ホイヘンスから人質交換の提案だど？」

いきなりソクラトンの声。

イヤホンから聞こえてきた。

「そうです。どうしたものかと」

低くしゃがれた威圧的な声。おそらくビッツだろう。

ビッツは続ける。「ワームホームR2の、ピネロン側出入口にあるトーカーサス星でこのこと。さっそく交換メンバーも示してきてます。このように……」

「ほお、これまた、どちらにとっても有能な人材ばかりではないか」

「はい、それで迷っておるのです。交渉に入ればいいのかどうか」

「入ればいいのではないか？」

「私もそう進言してるのです」突然、聞き覚えのある澄んだ高い声が割り込んできた。ニックだ。「こちらの状況が漏れるリスクをご心配のようですが、それはおあいこでしょう？ 人材はどちらにとっても宝ですから」

「わかっておるわ。しかし……」

ビッツは、ホイヘンスをどうしても信用できないと語る。

宣戦布告と同時にいきなり戦を仕掛けてきた。さらに、国内での弾圧と締めつけも激しいとの情報も入ってきている。

「それでも、自分を内戦の英雄の息子だと言い切って国民を納得させたという演説！一度地球に来た時ちらっと奴の顔を見た時には、そんなに文才があるようには見えなかったんですが」

「ブレーンにでも練らせたのだろうよ」とソクラトン。

「なら今回の提案もですかね。でない、と、いったい……」

ホイヘンスはいったい何を考え、何を狙っているのか。

今回の捕虜交換の意図がわからないと。

それに――

「トロント市に対しは、被害者救済もほとんど行わずに完全封鎖してしまつたらしいとの報告も入っております。それが証拠に、あそこには有能な同胞が何人かいたはずなのですが、彼らとはまったく連絡がとれず、今回の交換メンバーにも含まれておりません」

トロント市周辺は現在、上空からも観測不能になっているらしい。

放射能を封じるためにか、一面エキゾチック・マターかなにかで覆われているらしいとのことだ。

「そもそも……」とビッツ。「事故を利用して権力を奪い、市民を見捨て、問答無用に戦をしかけてくるような輩の言うことです。いや、そもそもあれが事故だったのかどうかも……」

「ヨハンセン氏の船が、市の上空で爆発したのは事実です」とニック。「近くにあつた地球基地からのデータにも複数、その証拠が残されていますし。目撃証言も複数あります」

ソクラトンはつぶやく。「船の機器になにか問題があつたか、爆弾が古いだけに何らかのきつかけで爆発したか……」

しかしビッツは納得しきれていない、

「事故ではなく、奴らが船を攻撃した可能性を、私は捨てきれないのですが」

「証拠は今のところ無いではないか」

「内からの攻撃……爆番をセットされていた可能性もないかと」

「……調査ができないようでは確かめようもないが」とソクラトン。「ただそれもちよつと考えづらい。トロント市は、ピネロンの首都ウルク市で働く政府関係者が大勢住む住宅都市だ。その上を、ロバートの船が予定通りに飛んでいたとはいえ、そこで意図的に爆発させようというのは、ちよつとありえん話だ。なにより、ホイヘンス自身の親族も住んでいたという話もあるし、ラフラス夫妻も……」

「ラフラス夫妻については、あの事故の前から行方不明との情報がありますが」とニック。

「さよう。それでもご子息やご親族はトロント市に残っておられたようだ」

「ご長男の奥様は、地球人だそうですね？」とビッツ。

「さよう。彼女も有能な科学者だった……」。

いったん声が途切れた。

ピーターは、父の最期の状況を聞いて、胸が押しつぶされそうになっていた。それでも……なぜ父が命を奪われたのかはわからないままなのだ。

やがて、ニツクの声が響く。

「事故か事件か、今はこの点を争っている状況ではありません。向こうの腹の内がわからなくなっても、とりあえずは交渉に応じる姿勢だけは示しておかないと、のちのちの和平の糸も失いかねないかと……」

「わかっておるわ」とビッツ。「応じるにしても家族はどうするか、です」  
ビッツによると、ホイヘンスからは交換要員の家族についての言及は、いっさいなかったという。

「こちらとしては家族もいっしょに返してもらわなければ、あらたな弱みになりかねないところが逆に、こちらが家族ごと帰すことは、反対にリスクでして。情報漏えいの危険もある。そのジレンマです。」

さらに家族といってもどこまでを容認するか。この点についてもご意見をお聞きしたいのです。通信では盗聴が心配ですから。ソクラトン教授」

なるほど、今日の訪問の理由はこれだったのかと、ピーターは納得した。

ソクラトンは答える。

「こちら是人質をとっておきたいが、向こうに人質を増やされたくない……そんな、こちらに都合のよいことばかりを考えれば、かえってつけ込まれるだけだ。多少のリスクは飲む覚悟でないか。……アデル大統領はなんと？」

「……じつは今回の交換要員には、リース財閥の関係者、つまり大統領ご自身のご親族がひとり含まれているのです」とビッツ。「たまたま遊学していた甥御だそうで。リース財閥は今回の原爆処理計画からんでおりますからなあ。子供ということで人質にされなかったのは幸いというか……。ただホイヘンスは、計画にかかわった自国関係者すべてを肅清するか拘束しているようでして、奴が心変わりする前に早く返してほしいと、リース側からはきつく言われましたわ」

「……つまり、この件では大統領側からの条件はないと？」

「返してもらえさえすればいい。要はわれわれにまかせるということですか」

「なるほど……」

ソクラトンは少し沈黙したあと、「だったら話は簡単ではないか。家族の範囲は、交換要員各自に決めてもらうのだ。それを徹底させなければ今回の交渉には応じないと、言うてみてはどうか？」

「偽装家族やスパイが入り込む余地は？」

「今回の交換要員のほとんどは、名の知れた者たちだ。家族構成は容易に確認できるはずだ。心の奥底まで探ることは不可能としても。それに……」ソクラトンはコホンと咳ばらいをし、「国民の行動は常に監視してるじゃないか、君たちは」

わずかな沈黙。

やがてビッツの声か。

「こちらにとつてはピネロン人、向こうにとつては地球人、そういう伴侶の場合には？ハ  
ーフの子供は？」

「それは……」

「ビッツ総司令！」ソクラトンを助けるようにニツクが割り込む。「連れ帰る場合のリスクは、わかっているはずですよ。わかってなければ困ります。そういう立場の者ばかりですか

ら」

(!)

ピーターは思わず息を飲んだ。

「またもわずかな沈黙のあと——」

「たしかに」とビッツ。

「ではそのうえで」とソクラトン。「こちらがそのようにきちんと家族まで返すことを、あえて大々的にピネロン側に宣伝するのだ。今は大きな声はあげられないものの、ホイヘンスの統治に反抗する国民もじつは少なくないと聞く。今回の件は、そういう隠れた反抗者をもとり込む人気とりの一環だと考えれば、無視はできんだろうて」

「なるほど……」とビッツ。「ホイヘンスにとっては、今回の動きは内政対策だというわけですか。なるほど」

「次は自分たちの家族が帰ってくる番だ、との希望を国民に与えることができれば御の字だろう」

「ふむ。それならなおさら……」

「なんじゃ?」

「残念ながらピネロン国民に、こちらのアピールを直接伝えることはまず無理です。情報がホイヘンスに一括されている状況では……」

「その点についてはですが、総司令殿」いきなり四人目の声が聞こえた。「じつは数時間前にピネロン星から、レガイテ・シアルと名乗る人物から、捕虜の交換要員にマリア・ヨハンセン氏を追加しろとの要請が……」

「なに?」とビッツ。

「なんじゃと!」とソクラトン。

(!!!)

ピーターはのけぞった。

ドアをバンバン叩く音と「ピーター開けて!」とのリンダの声が響いていたが、ピーターの耳には入らなかった。

レガイテ・シアル。母マリアの同母兄。

マリアの祖父——ピーターにとっては母方の曾祖父——の跡を継ぎ、旧体制下での高級官僚となっていた人物だが、ピーターは会ったことがなかった。

ビッツが声を荒げた。

「ロペス君、なぜそれをわしに報告せんのか!」

「いえ、まだ早いと報告させなかったのは私です。確認が必要でしたから」と、ニックが割って入った。「で、つい先ほど確認がとれたところですよ。これはピネロン星からの正規ルートに間違いありません。つまりピネロン星との交渉用ルートが、ホイヘンス直通以外に、もうひとつ開いたということです。たとえホイヘンス管理下にあるとしても、この点は重要ですよ」

「つまりそれは、レガイテがホイヘンスについたということにもなるな」とソクラトン。「ホイヘンスは国を治めることに関してはドシロウトでしょうから」とニック。「そのた

め、自分が倒した旧体制から、行政のプロを何人か引き抜いているらしいとの報告は入っておりました。あの演説文も彼らにつくらせたのでしょう」

「……なるほど。それでつじつまは合う」とビッツ。

「肉親の情か……」とソクラトン。「しかし今マリアは動かせんぞ、たとえ命に別条はなかったにせよ」

(命?……母さんに……何があった?!)

しかしここで音声は突然、バンという音とともに途切れた。

#### (四)

(盗聴器が……バレたのか?)

真つ青になり、ピーターは部屋を飛び出した。

いきなり開いたドアに驚き、リンダが小さな悲鳴をあげた。しかしピーターは、それにも気づかずつかつか早歩きで進む。

応接室の前で……足が止まった。

ドアの前に、キンスキーが待機していたのだ!

彼もピーターに気づき、視線を向けた。一瞬驚いた表情を見せ、鋭い視線でピーターをにらみつけたものの、すぐに何事もなかったかのように視線をはずした。

追ってきたリンダはおびえて、ピーターの背中にしがみつく。

ピーターはやっとりんダに気づき、落ち着かせようと頭をなでた。

(ダメだ。やはりレザーのことは聞けない……)

ピーターはその場に立ちつくす。

ほどなく、ビッツとニックが応接室から出てきた。

ニックの後ろには、見たこともない軍人がひとり。背は低いが頑丈そうな、浅黒い肌の三十歳台ほどの男。彼がロペスであろう。

四人もすぐにピーターに気づいた。

「何者!」

ビッツはピーターのピネロンマークに気づいて血相を変え、つかつかとピーターの近づき、ぐいと彼の肩をつかんだ。

「教授、これは!」

「ロバート・ヨハンセン氏のご子息です!」あわててニックがビッツを止めた。「私が保護してここに連れてまいりました。その件についてはお伝えし、お許しを得たはずです!」

ビッツは、ああそうだったかと、ピーターから手を放す。

そして、あらためてソクラトンに向かって、

「教授、それでもお気をつけください」

「敵の血が混じった危険分子ですからな」と、横からいきなりキンスキー。

これにはニックが叱咤の声をあげた。「キンスキー少尉!」

さらに「ビッツ君!」と、ソクラトンがめずらしく強い調子で声をあげた。

「ビッツ君! よいか、この子は、母親のことでわしらに報復しようなどと考えるような心

根の子ではない。それによく考えてみたまえ。この子は、向こうの高級官僚と天才科学者、ふたりの大切な甥にあたるのだぞ！」

(！)

ピーターは思わずソクラトンの顔を見やった。

ビッツはいったん目を閉じ、静かにうなずく。「それは……それはわかっております。だからこそ私は許可したのです」

「だったらわしを信じたまえ」

ビッツはうなずき納得するが、キンスキーはなおも頑固に抵抗する。

「しかし、しかしです、教授もご存じだと思いますが、先日、基地にスパイらしき不審人物が……」

「キンスキー少尉！」今度はビッツが叱咤の声をあげた。

そして、いったんコホンと咳払いしたあと、ソクラトンに向かって、

「その件については、他の件同様、内密に調査中です。国民にこれ以上混乱を引き起こさせるわけにはいきませんから」

ピーターは、サツとビッツの顔を見やった。

しかしビッツは、ずっとピーターの視線には気づかずのままだった。

多忙なビッツは、キンスキーとともにその場を去った。

「にらんでた……」

リンダのつぶやきに、ピーターもうなずいた。

二人が見たのは、キンスキーがニックとロペスをひどくにらみつけていたさまだった。そのロペス、初対面にもかかわらずピーターの心にひどく引っかけたものがあった。それがなんであるかはわからなかったが。

しかし、今はそれよりもなによりも、ソクラトンから聞きたいことがある！

そのソクラトン、リンダに部屋に戻るように諭していた。

ピーターを心配してごねる彼女をなんとか説得し、なんとかこの場から遠ざけたあと、ソクラトンはピーターに向かって軽く頭を下げた。

「ピーター、すまなかった。さっきはああでも言わないと……」

さっき……？

ああ、自分の存在価値について口にしたことを気にしていたのか。

しかし、今はそれよりも聞きたいことがある！

「母さんは？母さんに何があったんです？！」

「……聞いてたのか？」

「いったい何が？」

「収容所でリンチにあい、大けがを負ったのです」と、突然ロペスが声をあげた。

「！」

ピーターは凍りつき、ソクラトンは怒る。「ロペス君！」

「教授！」今度はニックが声をあげた。「いずれはわかることです。私がお話ししましょう」

ニックは淡々と語った。

マリアは、いったんある収容所に送られ、女性用の集団部屋に入れられた。そこで大勢から暴行を受け、瀕死の重傷を負ってしまったというのだ。

命はとりとめ、意識は戻ったもの――

「一時は母国語にさえ反応できず、自分の名前すらわからないありさまで……」

「……」

「一般のピネロン人にすれば、君のお母さんがいなければ、地球に来ることもなかった、君のお母さんの夫がいなければ、戦争も起きなかった。そう思われて、一身に逆恨みを買ったのでしょうか」

「……」

「本当に申しわけない、私どもがうかつだった」

「……」

ピーターはしばらくぼうぜんとしていた。

やがてぐつと息を飲み、「あ……会いに行けないのですか？いえ、会わせてください！僕の顔を見ればきつと母は……」

涙を浮かべて懇願するが、ソクラトンは首を横に振る。

「そんな簡単な状態ではない。黙っていたのはそのためだ。わしは先日看に行った。今はムリ……。はつきり言おう。物理的なダメージが脳にまで至っている。記憶が戻るかどうか、後遺症が残るかどうかは、リハビリしだいなのだ」

「……そ、そんな」

「大丈夫。今、安全な専用病棟に収容されています」とロペス。

「どこですか！そこはどこですか！」

「ローレル島。太平洋上にある人口島です」

「ラフマン！」

そこまでは言いすぎだとばかりに、ニックが声をあげた。

しかしロペスはニコリと笑い、大丈夫とばかりに、自分の胸をポンと叩く。

ニックは苦笑し、やむをえないか、といった表情でうなずいた。

ロペスは、ニックに合図を送るかのようには手をあげ、次いであらためてピーターに向かい、

「ピーター君、大丈夫です。そこは今、私が責任をもって管理しておりますから……ん？」

ピーターは、ずつとそれどころではなかった。

頭を抱え、うめいていた。

（父さん、ごめんなさい。僕は……僕はどこまでも母さんを守りきれなかった……）

「ピーター君？ピーター君？」

誰の言葉も届いていない。

「ピーター、しつかりするんだ！」

ソクラトンが大声をあげた。

ようやく言葉が届いたのか、ピーターはぐつと顔を上げ、ソクラトンに訴える。

「教授！どうして母をここに連れてこれられないのですか？病気なのに」

「……」

「ひとりでどんなに心細いか……母は、母は……」

「ピーター……」ソクラトンはピーターの肩を叩き、「わかるだろう？マリアは、君の母親以上の存在になってるのだ。だからこそ、今の状態が一番安全ともいえる」

「そう……」続いてロペス。「今の地球には、ピネロン人が安息できる場所はありません。たとえ君が救い出せたとしても……」

「……え？」

ピーターは、ハッとした。

顔をあげて、まじまじとロペスの浅黒い顔を見やった。

（この声！）

声だ。引っかかっていたのはこのロペスの声であることに気がついた。

「……」

いや、今はまず母のことだ！

「では、ピネロン星へ返すだけでも?!」  
と、今度はニツクの顔を見やった。

ニツクは目を閉じ、

「送還は断固避けたいのはやまやま。しかし、すべては交渉次第というのが現実なのだ」

（……ああ）

ピーターはがっくりと肩を落とした。

（すべては、ホイヘンスしだいということか……）

（五）

そのホイヘンスは、ピネロン星を見わたす宇宙空間にいた。

ピネロン星全体を、直属の部下たちと、彼が「サップス」と呼ぶ秘密工作員たちとともに抑え込んだものの、まだまだ不安定であることは十分認識していた。

「二度としたくない！ヘドが出る！」と、彼が最も嫌悪する文言を入れた演説をしてまでつかんだ国民の心も、うつろいがちだ。

当初より熱狂は冷めつつある。それだけに、できるだけ早く、彼らが抵抗できない国家体制に仕上げておかなくてはいけない。

そのために旧体制から引き抜いた人材は、一か所に集め、サップスの監視の下に置いていた。

彼自身は反乱や暗殺を恐れ、ごく信頼できる要員たちとともに宇宙船に常駐し、そこから地上に向けて命令を出していた。

彼の部屋に、兵士たちが飛び込んできた。ヤートをずるずる引きずりながら。

「ホイヘンス様、やっと捕まえました！」

ヤートの体は、ホイヘンスの前にドサツと、あおむけにされて置かれた。

顔はボコボコに殴りつけられ、腫れあがっていた。

ヤートはしばらくぼうぜんとしていたが、やがてゆっくりと頭をあげ、はれ上がった目を開けた。

ホイヘンスは、足を組んで座ったまま、冷たい視線を彼に向ける。

「三度も、とはいいい根性だ」

(！)

ヤートの目は、ホイヘンスではなく、ホイヘンスの横に立っている、小柄な男に釘付けになった。

頭髪はほとんどないが、豊かなあごひげ。

特徴的なのは目。右目が眼帯で覆われていた。

横に薄気味悪く広がる口。そこから、少し甲高い声が響いた。

「ホイヘンス様、やはりこやつを置いておくのは危険です」

「殺せとでも?」

「そうです」

「お前には情というものがないな、イモシ。かつての上司の息子ではないか  
イモシ!

その名を聞いて、ヤートは驚き、カッと目を見開いた。

次の瞬間、イモシに大声を放つ。「恥知らず!」

「な、なんだと?」

「裏切り者!」

「こ、こいつ!」

「イモシ!」

ヤートにつかみかかろうとしていたイモシを制するように、ホイヘンスが声をあげた。

「その通りではないか。イモシ」

「し、しかしホイヘンス様……」

ホイヘンスはイモシを無視し、棒——〈電子鞭〉と呼ばれるもの——をかざしながらヤートにたずねる。

「今度はどうやって独房を開けた?」

「勝手に開いただけだ」

「今度もか?」

「今度もだ」

「おやおおふくろから本当に何も聞いてないのか?」

「……はあ?」

「答えろ!」

ホイヘンスは大声をあげる。しかしヤートはおじない。

「何をだ? 何度も言ってるだろ? 何も聞いてないし、聞けるわけもない。ぼくが子供の頃から両親はふたりとも、家に帰るヒマなんてほとんどなかったんだ!……だから、知ってるとしたらそいつだ!」

そう言っつてイモシを指さし、声を荒らげる。

「そいつが知ってるはずだ。母さん父さんからぼくが最後に聞いたのは、そいつにハマられたということだ!」

「が……!」

イモシは仰天し、立ちすくんで目を白黒。

「……ほお」

これはおもしろいとばかりに、ホイヘンスはニヤリと笑った。そして、今度はイモシをじろつと見やり、

「本当になにも知らないのか?」

「ホ、ホイヘンス様、こやつ挑発に乗っては……」

「そもそもお前がへたなやり方をしたからだ、イモシ!」

「う……」

イモシは、ホイヘンスの威圧感に押され、思わず目をそらす。

ヤートの勢いはやまない。今度はホイヘンスに向かって、

「なんでトロント市を救済に行かない!」

「しつこい!」

ホイヘンスは一喝したあと、目を閉じ、ふうとため息をついた。

「なるほど……本当に何も知らないか」

軽く天を見上げたあと、電子鞭でカンと床を一撃する。

そして、今度はイモシに目をやり、

「たしかに……お前の推測どおりだったようだな」

意思がドアを開閉させる。

ヤートのDNAが、意思を通すためのパスワードになっている。

DNAを読み取れるセンサーと、脳波に反応するコントロールパネルのようなものが、エキゾチック・マターを使ってこの宇宙船内に貼りつけられている。

すべてはヤートの両親によって、仕組まれたこと。

——と、イモシから聞かされていたと、ホイヘンスはヤートに語った。

ただ——

「ただ、お前に説明している時間はなかった。だから何が脳波に反応するかはわからない。動作がどうなるかはわからない。そういうことだな?イモシ」

「おやめください、ホイヘンス様。そういうことをこやつの前では……」

「ドアの開け閉め以外に何が可能か、こればかりは確かめてみるわけにもいかんからな。危険すぎて……」

「だからっ、おやめください!」

「うるさい!聞かせたくないというなら、貼りつけられたものをはぎとらんか!」

「不可能ですよ。すでに吸収されてしまってます」

「自慢げに言い切るな!だったらなんで、事前に気づかなんだ?」

「身を隠す前に、こんなことをしている時間があったとは思えません。おそらくは、だいぶ前から、ひそかに……」

「バカか!それはお前が、だいぶ前から疑われてたということではないか。お前が無能だったからではないか!」とホイヘンスは、イモシの顔にひゅつと鞭を当てた。

「ひえっ!」

そしてその鞭をヤートに突きつけ、  
「ヤート、そういうことだ。お前のおやじおふくろはずいぶんふざけたマネをしてくれたもんだな。え?」

問われてヤートは、思わず笑みを浮かべた。

両親の優秀さを誇るような態度に、ホイヘンスは激高する。

「そうか……怖れを知らんのではなく、見下してるのか!」

いきなり立ち上がってヤートの前に立ち、足で腹に蹴りを入れる。

ドサツと床に倒れるヤート。

「わしらなど下賤の輩だというわけか……ふん、そのいまましいエリート意識を叩きのめしてやる」

「く……」

ヤートは、ぼうぜんとした意識の中でも、にらみつけることをやめない。

「ふ……怖れを知らぬ血も本物のようだな」

と、ホイヘンスは、獲物をいたぶるような笑みを浮かべる。

イモシは、やつとのことと声をあげ、

「ホ、ホイヘンス様、だからこいつは即刻殺しなされ!あまりにも危険すぎます!」

ホイヘンスは蹴りをやめた。

しかし、イモシの問いかけは無視し、まったく別の話題を彼に突きつける。

「ラフラスどもの手が入ったもの、その可能性のあるものは、この宇宙船以外にどれくらいある?」

「……はあ?」

「答えろ!」

「お、おそらく、こうした重要機関の三分の一は……」

「トーカーサスの設備もか?」

「あ……はい」

「なら、トーカーサスにこやつを連れていけ!」

「は……はあ?」

「捕虜交換の場だ。何かあった時役立つかもしれない」

「はああああ?!!」

ヤートはむくつと顔をあげた。「捕虜交換?」

ホイヘンスはニヤリと笑みを浮かべ、

「そうだ。科学者や政治家どもが中心だ。家族も含めるからそれぞれ百人近い人間の交換になる」

「か、家族も!」イモシは仰天し、「そ、それでは地球側の要求を飲んだのですか!」

「そうだ」

「官僚どもが勝手に話を進めてましたが……ですが……」

「官僚どもの職務への満足感も満たしてやる必要もあるろう?国民のみならず側近にも、わしが冷酷な独裁者と思わせてはならんのだ。」

それに……わしは言われずとも政治に関してはまだシロウトだ。わしの支配がすみずみ

に及ぶに至るまでは、しばらくは連中の助けが必要。だから、連中が作ったあんな吐き気がする演説文まで読んだのだ」

そしてヤートに向かい、

「今回のイベントには、お前の両親の知り合いもいることだろうよ。彼らが無事故郷に帰れるのを見守れ！これなら拒む理由などあるまい」

「……だったら義姉さんも」

「は？」

「ぼくの兄の奥さん……義姉さんは地球人だったんだ。地球に帰して……」

「しつこい！」

次の瞬間――

ホイヘンスはしゃがみこみ、いきなり懐から銃を向けた。

「！！！！」

仰天するヤート。

しかしホイヘンスの銃口は横に向く。

銃声！

銃を持ったまま倒れ込んだのは、軍人ではなく、普段着を着た民間人。

一撃で、頭から血を流す骸と化した。

(六)

あまりに突然のことだった。

ヤートは、手で口を抑え、目を見開いたまま動けなくなっていた。

ホイヘンスは、ジロリとイモシを見やる。

イモシはおろおろし、「り、料理人を募集して、それで来た男で……」

ホイヘンスは顔色を変えることなく、

「地上でこいつを選んだ奴を殺せ！連なる連中はみな殺せ！命令だ！」

動転するイモシは、兵士たちに命じ、死体を処理させた。

その間ホイヘンスは、なんとか平静を保とうとしているヤートを見やる。

「なんだそれは。自分はわたしたちより優れていたからからの意地か？え？」

ヤートはガタガタ震え、唇をかみしめながらも、なおもホイヘンスをにらむ。

「ふん、けなげだな」

ホイヘンスはニヤリと笑い、

「わしは昔から、子供の頃から、これぐらいのことには慣れてる。いつも父とかいう獣から殺されかけてたからな」

そして、まだ拭き取られていない床の血を指さし、「このとおりわたしはいつでもお前を殺せるのだ。お前の両親を引き出すのも、お前が生きてるように繕えばいいことだからな。今までお前を殺さなかったのは、ただ興味があつたからにすぎない。しかしこれからは違う……」

お前は自分の力がすごいと思うかもしれないが、それはお前ではなく両親がすごいのだ。

それを忘れるな!……お前の力は限定的で未知数だ。何に反応するのか、制御方法すらわからん。だから確かめてみようとの冒険心は起こすな。ひとつ間違えばとんでもない事態を引き起こし、自滅するものと思え!

当然お前は危険だから、拘束方法も変える。常に見張り、なにかあれば即刻射殺する。わかったな?……連れてけ!」

あわてるイモシ。

「ホイヘンス様、ですか……」

「お前こそ、先ほどの男に殺させればよかったかな」

「な!」

「もとはといえば上司の行動を監視しきれなかったお前が悪いのだ。責任をとれ」

「う……」

イモシはがっくりと肩を落としながらも、待機していた兵士たちに、ヤートを連れて行くように命じる。

ヤートはホイヘンスをにらみつけながらも抵抗はせず、その場を去る。

イモシはなおも納得できない。

「ホイヘンス様、あやつが現地で暴走すれば……」

「あいつは冷静だ」

「へ?」

「感情的にふるまってるだけだ。わしはああいう目を知っている」

「はあ……」

「何かあれば役にたつかもしれん」

「しかし、私どもの真の狙いを知れば……」

「暴走すれば殺せ!さっきそう言ったはずだぞ」

「う……」

「それより、はやくあいつの力を制御する装備を考えろ!それと、軍人以外の選抜にも十分気をつける!」

「……はい」

イモシはがっくりと肩を落とす、その場を立ち去ろうとするが、ハッと何かを思い出して、振り返る。

「ホイヘンス様、レガイテ・シアルの妹の件ですが……」

「……なんだ?」

同じ頃、地球では――

(シアル伯父さんか……)

ピーターは自室で考え込んでいた。

シアルとしゃべったのは、ごく幼い頃。機械越しで、それも数えるほどだったから、声

すら覚えていない。

あまりにも疎遠だった。原因は、妹マリアとの不仲にあると言われていた。マリアは、異母弟アブラハムとは仲が良かった。歳が離れ、しかも離れ離れで育つてきたにもかかわらずである。そのアブラハムが言うには、孫と同じ名前の祖父シアル（ピーターにとつては母方の曾祖父）と姉マリアとが不仲だった。それが関係してるのではないかと。

その不仲には、どうやら自分たちの父親（ピーターの母方の祖父）もからんでいるらしかったが、彼はすでに亡くなっているので、真相はわからないとアブラハムは言う。ただ、シアルは祖父の寵愛を受け、同じ仕事にも就いた。そのあたりに感情の行き違いがあるのではとも、アブラハムは言っていた。

アブラハムもシアルとは疎遠だった。ただ、別に仲たがいしているわけでもなかったよ、遠くから見た実の兄の近況を、ことあるごとに姉に伝えていたようだ。たとえば彼女が迷惑がろうとも。

自分にはきょうだいはいないが、きょうだいとはそういうものだろうとピーターは思っていた。不仲だったとしても、実の妹なのだ。

なんとかして妹を救い出そうとしているのかもしれない。しかし……。

（伯父さん、わかってほしい。今はダメなんだ！）

命にもかかわることだ。母がこんな状態で連れていかれることだけは阻止したい！

（ローレル島。だいたい場所はわかった。今なら間に合うかもしれない。今のこの僕力なら母さんを救い出せる）

しかし……。

——今の地球には、ピネロン人が安息できる場所などない。

先ほどのロペスの言葉が心に突き刺さっていた。

それに——

（ここには連れてこられない。人の出入りが多すぎる。第一、教授に保護の意思がない。僕はどうしたら……）

悶々とし続けていた。

そんな時——

ID時計が光った。

推すと、若い男の映像が浮かび上がった。

「レザー！」

ピーターは、もう一度ID時計を押した。

レザー・キンスキーがはつきりと、映像として浮かび上がった。

目鼻だけは叔父に似ていながら、叔父よりも背は低く、顔は丸みを帯びていた。

赤みがかった髪は長く、後ろでひとつにくくっている。

「ありがとう、対話モードにしてくれて」

レザーの低い声が響いた。

ピーターは、レザーの映像にかぶりつき、

「今まで何してた！連絡しても通じなかった……え！」思わず息を飲んだ。「どうしたん

だ、その顔……」

映像からもわかる、あまりにもやつれた顔。

口を震わせながら、やつとのことで言葉を発する。

「オレの叔父貴が……君と君のお母さんに何をしたかは知ってる……あやまってもあやまりきれない……」

続いて、一転して早口で語り始めた。

「親父と叔父のおふくろ——つまりオレのバアさんの実家が、今はやりの復興運動に熱心な宗教一族で……ただ叔父貴も親父も、そんなものには興味がなかったはずなんだが……叔父貴が今やってることはバアさんたちと変わらさ……」

あ……いや、話が長くなる。それより君に協力を頼みたいことがある。今度の捕虜交換で……」

「捕虜交換？トーカーサス星でのか？」

「う！」

急にレザーの言葉が詰まった。

苦しげに顔を伏せ、歯をカジガジさせながら、体をゆらす。

「ど、どうしたんだ！」

「う……ああ、ああダメだ！ごめんピーター、やつぱり、オレだけでなんとかする」

そう言ったきり、バチンという音がして、映像も音声も途切れた。

「レザー！」

レザーが一方的に切ったのだ。

あまりにも唐突に。

(どういうことなんだ、何があった……レザー！)

明るくて豪快で勇猛なはずの親友の、せつぱつまった顔、見たこともない苦悩に満ちた顔。

さらには、あのレザーならきつとなにかをしでかす、との予感が。

(そうだ！今の僕には……)

ピーターはひとりうなずき、覚悟を決めたようにゆっくりと、そばにあったトランクを開けた。

(七)

トーカーサス星。ワームホームR2の、ピネロン側出入口そばにある星だ。

大気は薄く、人類はそのままでは住むことはできない。ただ天候などが比較的安定した星のため、ピネロン星と地球どちらもが、長年中継地として使ってきていた。

現在は、双方の基地同士が、常に緊張状態にあった。

ワームホームR2は、地球側からは比較的近い火星エリアに開いていたが、ピネロン側からは最も遠いところに開いていた。そのためホイヘンスは、「本気になればいつでも占領できる。ただ、今は兵力と補給に限界がある」として、現時点では占領の動きを見せていなかった。

ホイヘンスは今のところトーカサス星を、最前線としながらも、中立地帯としても位置づけている、だからこそ捕虜交換の場所に指定したのだと、ビッツは分析していた。

そして、捕虜交換時での取り決めが念入りに練られた。――まずはいったん現地の基地から双方人員を全員撤退させる。そのうえで指定の場所に、捕虜を乗せるための輸送船一台ずつと、見守りロケット一台ずつのみを着かせる。交換が終わって捕虜を乗せた輸送船が飛び立てば、基地に人員を戻してよい。ただし双方すべての人員が基地に戻るまでは休戦は維持される――など。

すでに双方の基地からは、人員は撤退していた。

先にピネロン側の輸送船と見守りロケットが降り立った。

見守りロケットには、イモシと、両腕を拘束されたヤート、ヤートを監視する兵士が三人、乗りこんでいた。

着くや、宇宙服を着こんですぐにロケットを降り、移動をはじめた。

ヤートは驚く。

「なんで動く?」

「だまれ!」

――着用する宇宙服は、地球側ピネロン側どちらも、会話を通す仕様のものにしておくことも決められていたため、近距離ならほとんど会話に支障はなかった。

ヤートは、全身こそ拘束されなかったが、ぴったり兵士たちに銃を突きつけられ、囲まれ移動していた

「ホイヘンス様の命令でなければ、お前など……」

ぼそぼそ不満をつぶやくこの小さな男を、ヤートは冷静に観察し続けていた。

両親は身を隠す少し前頃から、自分たちよりずっと年上のこの部下のことについて、ヤートに語っていた。

頭はいいし仕事はできる、だがすべての経歴はたどりきれない、あきらかに腹に何かを秘めている、何かを常に隠している、イマイチ信用ならない、と。

それでも、こんなに媚びるタイプの人間だったとまでは、聞かされてはいなかった。

こんな俗な男に両親は欺かれたのか、との思いに唇をかみしめる。

やがて一行は、近くにある、ピネロン側の基地へと入っていった。

「コレ、約束違反でしょう!」

「黙れ!」

ピーターがトーカサス星に着いた時は、すでにイモシたちが動いたあとだった。

彼は、例のかっこうをして、広い平原のようなところに立っていた。

やがて地球の輸送船と見守りロケットが降り立った。

(なんてよく見えるんだ……)

この特殊服を着ると、あらゆることがよく見えよく聞こえ、頭も速く働くように感じて

いた。

反面、状況についていけずに、どこかぼうぜんとしていた。空間を超えることが、あまりにも簡単に、しかもピンポイントに果たせてしまったことへの戸惑い。

はじめて見る宇宙の光景に現実味を感じず、困惑さえしていた。

ある種のカオスのなかで、あらためて自問自答していた。自分はなぜここに来たのかを。

母を救うためにか？レザーが気になったからか？

やがて、双方の輸送船から代表者が出てきた。

地球側から出てきたのは、キンスキーだとわかった。

反対方向から出てきたピネロン側の代表者とは、それぞれ顔を合わせるように近づいていった。

ピネロン側の代表者の名前は、ハチュンと聞いていた。宇宙服からわずかに見える顔からは、キンスキーと同じような、鋭い眼光が光っていた。

やがて二人は合流するもすつと素通りし、そのまま進んで、それぞれ敵の陣地へと入っていった。

代表者どうしが、何かあった時のため、一時的な人質としてなるのだ。そのあとで、それぞれの輸送船からぞろぞろと、捕虜たちが出てきた。

(母さんがいれば、どうしたらいいんだろうか……)

しかし、捕虜たちはみな厚い宇宙服を着込んでいるために、顔まではよくわからない。ピーターは落胆した。

しかし――

(な、なんだ……?)

ハッとした。

なにか異様な大気の流れがある！

ヤートは絶叫していた。「何をするんだ！」

イモシが何も言わず、勝手に機械を操作していたからだ。

「動くな！」と、ヤートを威嚇し、次いで兵士たちに命令する。「こやつが動けば射殺しろ！」

そしてイモシはさらに操作を続ける。

目の前のモニターに、地球の輸送船が映る。

ヤートは驚き、

「まさか……もしや！……あ！」

ハッと気づいた。

「地球の輸送船を破壊するか！」

イモシは答えない。

ヤートは叫ぶ。

「そういうことか！ピネロンの秘密を知る地球人は、最初から消し去るつもりだったんだな。だから家族も含めたのか！地球から要求されたからではなく、最初っからそうするつもりだったのか！」

イモシの手が一瞬止まった。

彼は思った。たしかにホイヘンスが言うように、この若造は愚鈍ではない、と。

「卑怯だぞ！だまして攻撃して……そうか、ついでにこの星も乗っ取る気だな。このことを地球側が知れば、どんなことになると思ってるんだ！」

ヤートは叫び続ける。

これ以上騒がれてはやかいだ。そう判断したイモシは、真の狙いを語るべく腹をくくった。

首を横に振り、「少し違うな。家族を含めるつもりなど毛頭なかった。彼らはとめおいておけば貴重な労働力になるからな」

「労働力？」

「返還に家族も含めるとは、地球側とこちらの官僚どもの要求だ。その要求に対し、われらも考えたのじゃ。ならば家族もろともにとな」

「それは……」

「消し去るのは地球人だけではない。こちらも身を切る」

「……え？」

「有能な人材を失うのはまことに惜しい。しかしもろともなら、地球側の反発は少しは抑えられるはずじゃ」

「……つまり、ピネロンの輸送船も攻撃する？」

「そうじゃ」

ヤートは息を飲む。「それは……それは同じ。ピネロン人を殺すということか？」

イモシは首を横に振り、「同じではない。彼らはホイヘンス様に見れば、敵に魂を売った輩だ。そもそも粛清の対象だ。国民には、彼らはスパイだったと説明できる。彼らはそもそも、大半の国民には縁のないエリートたちなのだから」

「……納得できるとでも？」

「納得できなくてもよい。恐怖を与えることができる」

「……恐怖？」

「恐怖が最も、敵のみならず味方の不満分子の士気を下げさせる。今回の狙いは、たしかにホイヘンス様の人気とりだ。同時に、ホイヘンス様に逆らうとどういうことになるかを国民に教えることもでき、体制を盤石にすることにもつながる」

ヤートは真つ青になり、わなわな震え始める。

「それが目的か！それはよく対してもか！それがホイヘンスの最大の目的か！」

「総統と呼べ！何度言えば……」

「無関係なピネロン兵まで巻き込む気か！」

「英雄として、遺族への補償は手厚くする」

「……はあ？……はあ？……わけわからない、なんでこんなことを！トロント市の爆発の調査も検証もしないで……」

イモシは、はあとため息をつく。

「どいつもこいつも、身内に敵がいると敵には甘くなるようじゃな。そして、かつてのわしらと同じく失敗を繰り返す……。愚か者めが、そんなんじゃ生きていけんわ！」  
そう言って機械を操作し続ける。

「やめろ！」

ヤートは叫ぶが、兵士たちの束縛を解くことができない。  
しかし――

イモシの手が止まった。

「なんじゃ？」

離れたところにいるピーターも気づいていた。

(なんだ?)

地球側の動きがおかしい。

兵士たちが走っている。

何か予期せぬことが起こっていることはわかった。

(八)

それは――ほんの数分前のことだった。

捕虜交換の流れが止まったのだ。

地球の輸送船から、最後のひとりが出てこない。

キンスキーは、眉をひそめて味方の輸送船を見つめていた。

ハチュンは、なにかあわてふためいている地球の兵士たちにたずねる。

「どうした？あとひとりいるはずだぞ！」

しかし兵士たちは口をつぐむ。

そんな時、飛び出してくる二つの影があった。

「不審者だ！」

輸送船から、兵士が何人も飛び出してきた。

「何があった？」

ハチュンが、走りまわる兵士たちにたずねた。

「答えんか！」

言葉はわからなくても言葉の勢いに押され、兵士のひとりが立ち止まり、ID時計を操作する。

すると即刻、「かまわん、隠すな！そのとおり答えろ！」とのキンスキーの大声が。

指示を受け、兵士は深呼吸して、ハチュンに向かって、明確なピネロン語で語る。

「捕虜一名、不審者一名。計二名が逃走しました！」

ピーターは、騒ぎの中で、いつの間にか地球側の輸送船のそばにいた。バリエーを使って気配を消しているためか、混乱状態にある地球側は、彼の存在に気づかない。

「レーザー！」

はつきりと見えた。宇宙服から顔が見えた。

レーザーが、人間をひとり抱え、走っている。逃げている！

兵士たちが二人を追っている。

その距離は縮まっていく。体力のあるレーザーも、重い宇宙服を着た人間を抱えていては、さすがにスピードは出せないでいる。

まずい！このままでは捕えられ……いや、殺されてしまう！

ピーターは、飛び上がった。

「な、なんだあれは！」

「あいつは？」

「あれが不審者？」

地球の輸送船の上に人々の視線が注がれた。

ピネロン側にいるキンスキーからも、地球側にいるハチュンからも、後ろ向きに立っている人物が見える。

「誰だ！」

「お前は誰だ！」

いたるところから飛び交う怒号。

——すべての視線が自分に向けられていることを確認して、

その髪の毛長い人物はゆっくりと振り返り、叫ぶ！

「人呼んで、遊星仮面！」

英語だった。すべての兵士たちの宇宙服のなかに、その声はその響きわたった。

「あいつはあの時の……」

キンスキーは目を見開く。

空気は凍り、謎の静寂が支配した。

静寂を破ったのは、ピネロン側から放たれたレーザー光だった。

それも、本来なら人がいてはいけないはずの基地から。

イモシとヤートがこもっているピネロン側の基地からであった。

遊星仮面はつかさず、指笛を吹く。

「ライダー！」

即座に小型のロケットが飛んできた。

どよめく一同。

「な、なんなんだ……オープンカー？」

レーザーを放ったイモシ自身も、驚く。

(人……? 地球人……? 何者?)

ヤートからは、その姿ははっきりとは見えない。

その間にキニスキーとハチュンは、すでに自分たちの陣地に戻っていた。そして自国兵士たちを率いる。

小型ロケットは、まるで注意をひきつけるかのように、空をぐるぐるまわっている。

地球、ピネロン双方からの攻撃も受けつけない。

「もういい、すぐに出発しろ!」とキニスキー。

「え……? 何かしあいつは……」

「これ以上へたに手をだしては、敵の思惑に入りかねん。忘れるな、ここはあくまで敵の守備域だ! われわれの任務は捕虜を無事地球に連れ帰ることだ!」

そして、ID時計を操作し、

「基地所属の兵士たち、すぐに基地に戻れ! 捕虜は全員回収した。われわれは出発せねばならん。あとは……あとは頼む!」

キニスキーの声は、最後は絶叫だった。命令とはいえ、こんな混乱の中に仲間を置いておかないといけない悲壮感からだった。

そんな彼は気づいていなかった。ピネロン基地から自分たちに銃口が向けられていることを。

その時――

「届け、シューター!」

遊星仮面の手からは、渾身のレーザー光の塊のようなものが、飛ぶ。

すぐに、キニスキーたちに向けていた銃口を一瞬に破壊。レーザー光を遮断。

「な!」

驚き、床に転んだイモシの後ろでは、いつのまにか兵士たちの拘束から離れたヤートが立っていた。

「卑怯者!」

そう叫んで、遊星仮面は、基地そのものにシューターを放つ。

基地の一部が壊された。

さらにもう一撃!

また一部が破壊。

さらにもう一撃!

「ああ!」

イモシは叫ぶ。あれはまともに自分たちに当たる。これは危ない!

もうダメか! と思われた時――

基地が瞬時にバリヤー光に覆われ、シューターがはじき飛ばされた。

「ヤート?」

イモシが見上げると、ヤートがドンと機械に手を置き、渾身の力で仁王立ちしていた。その姿勢のまま、ヤートはモニターを見る。

映っていたのは、ライダーのなかにいる遊星仮面。その姿のアップ。  
(何者?)

遊星仮面も、ライダーから塔を見やる。  
(誰?)

自分と同じ年頃の青年の姿を見て、ハッと冷静になる。  
さらに振り返ると、地球の輸送船がこの星を離れようとしていた。

(しまった、レザーは?)

輸送船の周辺をたしかめるために、塔から離れた。

(どこへ?)

遊星仮面が行く先を、ヤートは見つめ続けていたが――。

「うわっ!」

いきなり突き飛ばされた。

イモシが立ち上がり、彼を突き飛ばしたのだ。

イモシは再び機械に向かおうとするが――

「もうよい!」

ホイヘンスの声が響きわたった。

(九)

ピネロン側の輸送船も見守りロケットも、やがて宇宙空間に出た。

輸送船に乗ったハチュンは、椅子の上に座り込んでいた。

ひどく憔悴しきっていた。

部下たちは心配そうに、

「一尉……?」

「大丈夫だ、皆が無事で良かった……」

ハチュンの表情には、どこか安堵の表情も浮かんでいた。

部下はたずねる。「あれはなんだったのですが?地球側の?」

「こちらの味方ではない。あれは地球の言葉だ」

「しかし、地球側もうろたえていたようで」

「の、ようだな」

「放置してよかったですか?」

「得体のしれないものに対しては、情報をとるのが先、とりあえず追わず戻れとは、ホイ

ヘンス様からのご命令だ」

「捕虜をひとり、回収できなかつたのにな?」

「捕虜ではない。不審者のひとりだったのだ」

「ひとり?…たしかふたりいましたが……」「それだったら、あんなものをもぐりこませ

てたのは、地球側の約束違反で……」

「もういい!もう触れるな!こちらも約束違反を犯したのだ!」

「一尉?」

「ともかくみな無事でよかった、よかった……よかった……われわれも卑怯者にならずにすんだ……」

憔悴しきったハチュンの顔から、涙が吹き出していた。  
部下たちは当惑し、顔を見合わせた。

「わしはハチュンの性格を忘れてた！」

イモシとヤートの前で、モニターのなかのホイヘンスはいきなり大声を張り上げた。

「お前だけはずぐに輸送船から離れると言ったが、考えたらそんな行動、あいつにはムリだ！あいつは部下のことを考え、逃げ出さなかったはずだ！」

「部下たちの家族の生活は保証すると、ホイヘンス様自らが伝えていたではありませんか！」

「いや、あいつにはムリだ！部下たちと運命をともにしたはずだ！……そうだ、地球に媚びた無能なエリートなどもどうなってもよい。しかし有能な部下を失うのは損失だ。そうだ、これでよかったのだ」

「よかったですと？まさか！……そのために捕虜を通じてこちらの秘密が！」

「秘密なら、変更すればいいのだ！戻ったら、お前の部下の科学者どもをたきつける、いろいろと仕様を変えろと」

「ホイヘンス様！」

どこまで気まぐれなのかと言いかけたところで、ホイヘンスの顔を見たイモシは、思わずギョツとなった。

ホイヘンスが、見たことがないほどに憔悴している。

なにか激しいショックを受けているようにも見えた。

「……聞いていいですかあ？」

イモシの横からいきなりヤート。

ホイヘンスの命で、拘束を解かれていたのだ。

「あんたが連れ帰る気もなかった無能なエリートたちは、どうする気だ？」

「気になるか？……ああ、心配せんでよい、もう殺さんわ。ただし拘束はする。そのうえで情報は搾りとる」

「外道！あんた、あわよくばあの星を占領する気でもいたんだろう？！そのためにあんたは自分に忠実な兵士たちまで犠牲にしよう……」

「うるさい！基地があそこまで壊されては、占領などしばらくは無理だわ」

「外道！」

「うるさい！いいか、今後わしのそばでそんな言葉を吐けると思うなよ！」

イモシは驚く。

「ホイヘンス様、そ、それはどういうことですか？」

「これからそいつはわしのそばに置く。わしが直接監視する」

「き、危険です！さっきのように逆らって……」

「だが結果としてはお前を救った。そいつがお前を止めなかったら、もっとややこしいことになってたかもしれない。これでどちらにも非ありとして、事態の鎮静化ははかれる」

「ホイヘンス様、それでは最初の話とは……」

「黙れ！事態が変われば対応を変えるのは当然だ！なにによりあの不審者に対抗できたのはヤートだけだったことを忘れるな。……あの不審者の映像はあるか？」

「え、あ……少しなら」

「すぐに送れ！」

「なにか心当たりでも？」

「黙れ！分解するぞ！」

分解するぞとは、ホイヘンスが最も感情的になった時に発する言葉だということを、イモシは知っていた。これ以上は突っ込めない。

ヤートも考え込んでいた。

遊星仮面 と名乗った先ほどの者は何者なのか？と。  
なにか自分に近いものがあるように感じていたのだ。

その遊星仮面は、ライダーに乗って、宇宙空間を飛行していた。  
意識は完全にピーターに戻っていた。

(まもなく移動ポイントか……)

ライダーのなかには、気を失った人間が二人。

レザーと、彼が抱えていた人間——セミロングの薄い茶色の髪をした少女が。

あきらかにピネロン人！

二人に聞きたいことは山ほどあるが、それは彼らが意識を回復してからだ。

それよりも——

(キニスキー少尉は、自分の甥に気づいたのだろうか？)

もし気づいていたら、レザーは、それにこの少女はどうなるのか？

いや、今はそれよりも——

ピーターにとってはるかに気になっていたのは、母のことだった。

(今、母さんはどこに……母さんは、捕虜の中にいたのか？)

いると思つて、あの時とつさに行動をとつた。

母に問いかけたのだ。これを見て自分を思い出してくれ、と。

(あれは母さんが僕だけに演じてくれた、おハコのスタイルだった)

ピネロン星では、ピネロン人の前では決して見せてはいけないという演技。

なぜなのか、母はまったく教えてはくれなかったが。

(母さん……)

おそらくは、戦争をやめさせることによってしか、以前のような平和な生活はとり戻せないだろう。

しかし今の自分なら、たとえピネロン星に連れて行かれたとしても助け出せるのではないか、この力を使えば。

もしかしたら、自分ならこの戦争をやめさせることができるのではないか？  
母の所在がわからない不安をかき消すように、そんな自信がみなぎってくるのを感じた。